

petiolate ranging 1.0-1.5 cm long, and with broadly cuneate bases in broad fronds or often narrowly cuneate to attenuate in narrow ones. Venation with fine secondary areoles of veinlets. Sporophyll linear, 5-14 cm long, with conspicuous peduncle; spike 1.5-2.5 cm long; sporangia 0.6-1.1 mm in diameter; spores $23-28 \mu \times 28-30 \mu$ in polar and equatorial diameters respectively, with minutely subreticulated sculptures of exines. Growing season is April to June. Chromosome number, $n=240$.

Hab. Japan. Honshu; Pref. Ibaraki: Tonegawa near Chobei-shinden, Toride. Holotype: Nos. 67001-67005 in Chiba Univ.

Specific epithet is dedicated to Mr. Tomitaro Namegata who found out firstly the present materials and has been making efforts to elucidate complexity of Japanese *Ophioglossum* standing on the ecological point of view.

Literature cited

Kurita, S. & M. Nishida, Bot. Mag. Tokyo 78: 461-473 (1965). Ninan, C.A., Cytologia 23: 291-316 (1958). Nishida, M., Bull. National Sci. Mus. (Tokyo), No. 44: 325-335 (1959). Prantl, K. Jahrb. Bot. Gart. Berlin 3: 297-350 (1884). Sahashi, N., Jap. Journ. Bot. 44: 48-53 (1969) (in Japanese). Verma, S.C., Cytologia 22: 393-403 (1957).

○タイ国産ミョウガ属の植物に花が咲いた (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI:
Flowers came out on a zinger from Thailand.

数年前に東南アジアの旅行から帰られた方がタイ国から赤色の苞片から成る球果状の果穂をもち帰られた。それから数粒の種子をいただき播種しておいたところ、昨年 8 月に花がさいたので、一応これを *Zingiber casumunar* Roxb. と考定したが、この類の知識にとぼしく、その上、同地方の実情に通じていない私としては困難であったが Curtis' Botanical Mag. (1813) t. 1426 に該当するように思われたので、かく考定して見た。同誌の記事によれば、同図のものは 1811 年 8 月にケンシントンで咲いたもので、欧州で咲いたのはじめてのものだという。いま私のいうものがこれと同一物だとすれば恐らく日本で咲いたのはじめてのものかもしれないので観察したところを略記して見ると、根茎は横走し、径約 2 cm、断口は帯白色で多数の太さ約 2 mm の根を発生し、そのあるものの先端にはやゝ紡錐形の塊根を生じる、そうして表面には細根の発生を見る。地上茎は高さ 1-3 m に達し径約 2 cm で 28×25 cm ほどの狭槽円状披針形の葉 18 枚内外を数う。葉鞘の頂部には細毛塊があり、葉身の基部に近い裏面



には多少の散生毛がある。根茎から発する花穂は 10 片の苞のある 10-20 cm の長さの柄を有し、その頂端に高さ 15 cm で球果状の花穂をつける。花穂部は楕円状で先端やゝとがり、辺縁は膜質で紅縁の苞がかさなり合い、全形マツかさ状を呈し乾くと縦線が著しく現れ、果時には全体紅色になり苞間からは白色の 1 花をななめにつける。花の構造は、この科に共通であるから略すが唇弁は先端が 2 裂する。しかし深淺の程度には多少の差がある、この点について R.H. Holttum 氏は花の若いときには浅く、時を経たものでは深いと記している。Roscoe 氏の図とくらべるとき注意すべきことかと思われる。なおこの植物は *Z. zerumbet* Smith と混同されることもあるようだが、現地の事情に詳しい Holttum 氏によれば、後者は葉の幅がはるかに広いようである。ついでながら K.R. Kirtikar & B.D. Basu: *Indian Medicinal Plants* (1918) や R.N. Chopra etc.: *Glossary of Indian Medicinal Plants* (1956) には彼の地ではシヨウガと同類の生薬として扱われているとある。